

# 目次

まえがき

序章

「PL信仰生活心得」とは

……

9

第一条

自分のすること言うことに誠をこめ、  
心を行き届かして暮らします。

……

17

第二条

人や物事や天候の不足などを思わず、  
自分の考えや仕方の足りないところを発見し、  
何事にも創意工夫の精神を忘れぬようにいたします。

……

26

第三条

人や物事に感謝の心をもって暮らします。

……

34

第四条

人のためをはかり、みささげの心を忘れません。

……

43

第五条

何人にも何事にも腹立てません。

……

52

第六条

自分の考えにとらわれて強情がりません。

……

61

……

6

第七条

気ばかり急いだり、心配しすぎたり、物事や自分のことを悲観したりいたしません。

……

第八条

欲な心だしません。

……

第九条

何事にもずるいこととなるような心だしません。

……

第十条

夫婦はしんから仲良くして暮らします。(上)

……

夫婦はしんから仲良くして暮らします。(下)

……

第十一条

子供は神の子と想着て、世のため人のため役立つ人となるように育てます。  
また子供は親の鏡と悟り、感情の満足に走って情におほれるような育て方はいたしません。(上)

……

子供は神の子と想着て、世のため人のため役立つ人となるように育てます。  
また子供は親の鏡と悟り、感情の満足に走って情におほれるような育て方はいたしません。(下)

……

第十二条

朝は気持ちよく起きます。

……

第十三条

食べ物の不足思うたり、好ききらい、よりごのみ、食べ過ぎ飲み過ぎ、むらぐいとなることはいたしません。

……

第十四条

怠け心はだしません。  
また仕事しながら、不足思うたり人のことを気にかけて  
不足思うたりいたしません。

⋮

150

第十五条

何事にも度を過ぎさぬようにいたします。

⋮

159

第十六条

自慢の心や偉そうにしたがる心だしません。

⋮

168

第十七条

人の気持ちを悪くするようなこと言いません、いたしません。

⋮

177

第十八条

人を粗末にするような思いたしません。

⋮

186

第十九条

宝生する心を忘れません。

⋮

195

第二十条

感謝新友を授かることに努めます。

⋮

204

第二十一条

神の恵み、おしえおやの恵みを忘れません。

⋮

212

カバー絵 安木洋平「青ノアイダ」

— — — — —

## まえがき

PLの教えは「人生は芸術である」というおしえおやの悟りを説いています。芸術ということを言葉で説明するのはとても難しいことです。具体的な生活の中では、上手な表現とか、下手な表現とかの差はあっても、それぞれが自由に生活しているのです。

しかし、自由に生活しているといっても、目の前に現れる神業かんわざとの関わりが自己表現の条件になるので、その対象との関わりがうまくできなければ自分自身の生活がうまくいきません。対象との関わりがうまくいかないのでは、自分の人生そのものがうまくいきません。

---

したがって、幸せな生活を送るために知っておくべきことを箇条書きにして示してあるのが「PL信仰生活心得」です。心得の全文解説は『PL信仰生活心得解説』（芸術生活社刊）に詳しく書いてあるので、そちらを参考にしていただければよいと思いますが、心得の一箇条一箇条をどのように受けとめ理解すれば実行しやすいのかのガイダンスとして『暮らしを彩るPL信仰生活心得』を上梓する次第です。

あくまでもガイダンスですから、実行してその内容を実感してください。

平成二十九年二月

川島通資



## 序章

---

# 「PL信仰生活心得」 とは

---

## PL信仰生活心得の各箇条を理解して

PLの教えは、現実の世界をありのままに認識し、その中で生きる人間の自然な在り方を示すものです。

人間には自由が与えられているのですから、どのような生き方をしても生きること  
はできませんが、人としての真福を全うするためには「人生は芸術である」というおし  
えおやの悟りによる生き方をすべきです。

PL遂断詞しきりのことばの最後の方に「されば人の世よの災難くるしみ病苦わずらいは みしらせと知りて何事なにごとも喜よろこ  
び 神業かんわざのまにまに我執おのれを捨てて践ふみ行おこなうこそ 人の人ひとたる真まことの道みちと悟さとりて」とあるよ  
うに、人間の自然な生き方は「神業のまにまに我執を捨てて践み行う」ことにあります。  
神業のまにまにとは、その時その時に自分の前に現れてくる人や物事と関わりを持  
つということです。そして目の前に現れる神業に対処するのが、人間の自然な生き方  
なのです。ところで、目の前に現れる神業は私たちの都合に関係なく、自分にとって  
いやなことや困ったこともあります。そうした困ったことやいやなことが無いのが幸  
福であると思つて、招福除災を神に願うのがかつては信仰の主目的でした。

しかし、人間の生活に現れる苦痛には、必ず何らかの意味があるのです。その意味

をきちんと知って暮らさなければ楽しく生きることができません。

例えば、人は空腹になりすぎると痛みを感じることがあります。その痛みが起ると、何かを食べて空腹を満たします。このように、生命の維持に直接関係する苦痛に対しては動物的本能で対処できますが、動物的本能だけでは対処できない苦痛もあります。

頭痛やけがなどの苦痛に対しては、薬を飲んで痛みを和らげるという対症療法（その時の症状を和らげる手当て）をするのが精いっぱいでした。それがPLによって、「苦痛」には「みおしえ（幸福への道筋を示す）」という意味があることが発見され、その意味を「みおしえ」を通して一人一人に教えていただけるといになりました。

人間は他の動物のように習性で生きているのは違い、個人個人の自由意志で生きています。したがって、人間はこうすべきであるというような普遍的倫理では、そのときどきの苦痛に対して適切な対処をすることはできません。そのため、PLでは一人一人に「みおしえ」を通して、それぞれの生活が芸術生活となるようにアドバイスしているのです。

PLの世界観はPL遂断詞の中に概略示されています。そして一人一人の自己表現